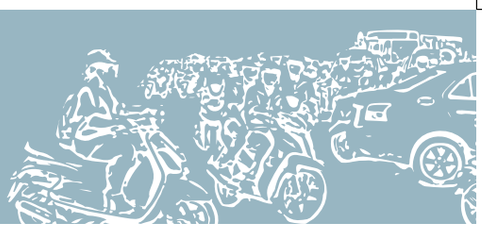
砂名の ベトナムに乾杯



第35回　ベトナムからも広く世界に空手道の普及をしてゆこうという志

年に一回、7区の日本人学校において、「国際空手道連盟極真会館　坂本派ベトナム支部」主催による、「ベトナム空手道選手権大会」が開催されます。2019年から毎年開催され、今年7月の大会では第四回目の開催となりました。私はVetterの記者として毎回、取材・撮影させていただいております。

今年は子ども27名、大人27名の54名がエントリーし、日本人はじめ、ベトナム人は子ども1名を含む16名が、ロシア人は子どもたち11名が参加し、日越ロの国際色豊かな選手権大会となりました。

第一回目は日本人がほとんどでしたが、年々、日本以外の国の参加者が増えてきました。試合のようすについては、Vetter誌上や私のブログでも記事を書いていますし、また東京で叶わなかった空手の撮影が、こうしてベトナムで叶った経緯と感慨についてはブログにも綴りましたので割愛します。

今回の試合を取材していて印象的だったのは、4時間のリーグ試合を通して垣間見える、お国柄の違いです。

5歳から10歳ぐらいの子どもたちにとって、実際の試合は過酷で危険に見えます。ファインダーから覗いていてもハラハラしますので、対戦相手と面と向かって戦う子どもたちにとっては、恐怖との闘いであることは想像に難くありません。一回目、二回目の大会では、及び腰の子どもたちも散見されましたが、今年は全般的

休憩時間に披露された、大門先生のバイオリンと、フォローするリカルド先生。まさに「文武両道」の精神ですね。

に果敢に戦っていました。アタックを受け、倒れて泣き出す子、負けて悔し泣きする子供は、どこの国の子どもたちも同じですが、試合前の「押忍！」の挨拶が、澄んだ声で体育館中に木魂していたのは、圧倒的にロシアの子どもたちでした。日本の子どもたちの中でも有段者の子たちは挨拶がきちんとできますが、たいがいは声が小さく覇気がありません。また子供のことですから4時間じっとしていられないのはどこの国も大差ないのですが、試合が行われるマット周りを走り回っているのはだいたい日本の子どもたちです。日本ではレストランや乗り物など公共の場で騒がしい子どもたちが多く、恥ずかしながら私たちも7区のレストランで、お子様連れのご家族たちと会食中、子どもたちが走り回って、他のテーブルの欧米人客から注意を受けたことがありました。それに比べてロシアの子どもたちは、試合を待つ間、試合を見ている間、比較的行儀よくしています。所属する団体や、コーチの指導にもよるでしょうから、一概に国柄と結び付けて考えるのはいかがなものかとは思うのですが…。

一方ベトナムの青年選手たちは、闘争心の高さ、闘いの激しさにおいて群を抜いており、スタミナもあります。ですが試合後、マット上でガッツポーズをしたり、「オウッ」と大声を挙げたり、空手「道（どう）」の精神にそぐいません。

小さな子供までもが統制の取れているロシア人、不屈の闘争心を見せるベトナム人。日本はどちらの国とも、ずっと良好な関係性を築きたいなと、ふと思うのでした。

そしてオリンピックの競技でもあり、世界中の人たちに一目置かれる武道「空手」を、ベトナムからも広く世界に普及してゆこうという、大門先生の志にはみな応援しており、当店もはじめ、多くの企業様がこの試合に協賛しておられます。

月森砂名（つきもりさな）

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯！】に続き、2020年、Pham Viet Chanhにて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人Layer Boxにて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。

p34_砂名のベトナムに乾杯_35.indd 34　2022/10/10 12:20